幻の錦

只野　哲

一　法隆寺――錦のなぞ

七世紀の初め、聖徳太子によって建立されたと伝えられる法隆寺――。その壮大な七堂伽藍の中に、ただ一つ、創建以来堅くとびらを閉ざしたまま、何人も立ち入ることの許されない聖なる御堂があった。その名を夢殿といった。

千二百年の間、ひっそりと閉ざされ続けてきた夢殿のとびらを、初めて開いたのは、岡倉天心とフェノロサの二人であった。その夢殿の中から、白衣に包まれた秘仏、救世観音が姿を現した時、そのかたわらから一巻きの織物が発見された。今日、世界的に有名となっている、国宝「獅狩文錦」がそれである。

この錦は、縦二・五メートル、横一・三四メートルあり、二十個の小円によって形づくられた円文（円の文様）が縦・横に組み合わされている。そして、それぞれの円文の中には、一本の樹木を中心として、左右対称に、馬に乗った四人の武将が獅子を射るという図柄が描かれていて、まことに壮大華麗である。

しかし、聖徳太子の「錦の御旗」であったと法隆寺の伝説に伝えられるこの錦が、どのようにしてこの法隆寺に伝えられてきたのか、その由来を知る者はだれもいなかった。「獅狩文錦」は深いなぞに包まれていたのである。

龍村平蔵にとって、この法隆寺の「獅狩文錦」の由来のなぞを解くことは、長い間の課題であり念願であった。

龍村平蔵は、京都に住む織物の研究家である。彼がその半生をかけて取り組んできたのは、古代錦の復元という仕事であった。古代の錦を復元する――それはまた、綾なす糸をたぐって、古い時代の歴史と文化を探ることでもあった。彼が、シルクロードの東の終着駅と呼ばれる正倉院の古代錦の復元に、その情熱を傾けてきたのも、まさにそのためであった。

だが、その彼が興味を抱いた「獅狩文錦」の由来の秘密のなぞを解く手がかりは、容易につかむことができなかった。法隆寺の錦は、深いなぞにつつまれたまま、月日が流れていった。

二　シルクロードの記憶

龍村平蔵が不思議な錦の断片を初めて見たのは、興善寺住職橘瑞超のもとであった。それは、見る影もなく色あせて、ところどころに朽ちた穴のある錦のぼろぎれであった。だが、その錦の中央に近い、楕円形に切り取られたような三つの穴は、よく見ると人間の顔の目と口に見えた。あたかも人間の顔からはぎ取った錦の仮面のように見えてきた。まさしくこの不気味な錦こそは、橘瑞超が五十年前シルクロードの探検に赴いた時、西域、トルファンの地底の墓から発掘したミイラの面覆いだったのである。齢すでに七十歳を超えた老僧の遠い記憶の中から、仮面の錦のいわれが、おぼろげに浮かび上がってきた。

今世紀の初頭は、世界の大国の目が一斉に中央アジアに注がれ、イギリスのスタイン、スウェーデンのヘディン、ドイツのル＝コックなどの探検家が続々と中央アジアへ乗り込んだ、華々しい探検の時代であった。これら諸国の探検隊に伍して、西本願寺門主大谷光瑞の率いる日本探検隊が、シルクロードの遺跡を求めて初めて西域に赴いたのは、一九〇二年（明治三十五年）である。大谷探検隊は、一九一四年（大正三年）に至るまで、前後三回にわたりシルクロードへ派遣されたが、橘瑞超は、その第二回と第三回探検隊の中心人物であった。初めて探検に参加した時、彼はまだ十八歳の少年であった。

大谷探検隊の壮挙は、当時の日本にとって画期的なものであった。ある時は炎熱のタクラマカン砂漠を渡り、ある時は雪の天山山脈を越え、またある時は敦煌や楼蘭の遺跡を発掘した。そして一九一二年、トルファンのオアシスに栄えた高昌国の廃墟、アスターナ古墳を発掘したのであった。史上に有名なスタイン探検隊の発掘に先立つこと二年である。

ミイラは、アスターナの砂の下およそ十メートルの地底の墓に、数々の副葬品にうずもれて眠っていた。探検隊員の一人は、その当時の模様を、おおよそ、次のように日記に書き記している。

「木棺の上かあるいは死体の約六十センチの高さに、蚊帳のようなものを四隅からつるしている。この蚊帳の上部、つまり天井は絹地で作り、四方に垂れている部分は白木綿を用いている。……ミイラは夫婦そろっているのが多く、なかには小児が両親の枕頭に置かれているのも見た。……ミイラは足をのばし、両手に杵形の小木片を握り、十数個の真珠を糸でつないだものを口中に含み、薄い鉄板に小孔をうがった眼鏡をかけ、その顔の上を錦の裂地で覆い……。」

千年を超える歳月を、トルファンの地底、高昌国の栄華の跡にうずもれていたその錦の裂地に、法隆寺の錦のなぞを解く鍵がひそんでいようとは、恐らくその時、想像すらしなかったであろう。

三　ミイラの仮面

ミイラの仮面――今、その色あせた錦の断片の中におぼろに見えるのは、鹿のような一頭の動物と、そのかたわらに立つ一本の樹木、そしてその木の幹の下に織り出されている「花樹対鹿」と読める一対の漢字――恐らくは大きな錦の文様の一部が死者の顔の輪郭に合わせて切り取られ、面覆いとされた後に、目と口の部分が朽

ちて穴があいたものであろう。だとすれば、欠け落ちた部分には、いったいどのような文様があったのであろうか。

そのなぞを解く鍵は、ミイラの仮面に残された文様の中にひそんでいたのだった。龍村平蔵は、仮面の右下に織り出されている「花樹対鹿」という漢字が、一対の対称文字となっていることに気づいた。つまり、縦二列に並んでいる文字のうち、左側の文字は、右側の正常な文字の裏返しになっているのである。織物の原則からみて、この錦の文様は、左右対称の屏風形式で織り出されたものにちがいない。

龍村平蔵は、仮面の文様を、その中に描かれている樹木を中心軸として右側に展開してみた。すると、半円に囲まれた中に、樹木を中心にして対称に向かい合う二頭の鹿の姿が現れた。さらに、この図形を下の方向に展開すると、まさに、円を基本構図とした文様が姿を現したのである。

中央の樹木をはさんで向かい合う二頭の鹿。それを囲む円文は、二十個の小円で形づくられ、大円の外側の四隅には唐草文様の一部が見えている。あまりにもあの法隆寺のなぞの錦によく似ているではないか。龍村平蔵はうめいた。

四　肖像の秘密

法隆寺の夢殿の奥深くから発見された「獅狩文錦」の文様が、ヘレニズム文化の深い影響を受けたササン朝ペルシア様式の文様であることは、発見者の岡倉天心やフェノロサらによって早くから指摘されていた。特に、円文の間にあるアーカンサス十字唐草と呼ばれる文様が、ギリシア直系の文様であることから、東西文化交流の一つの証拠とされていた。

ではこの錦は、古代ペルシアで織られたものであろうか。円文の中に配された四頭の馬には、「山」・「吉」と読める二つの漢字が織り込まれている。この漢字の存在は、少なくともこの錦の織られた場所が、ペルシアではなく中国であったということを意味しているものと思われる。事実、フェノロサ以来多くの学者たちも、中国、それも唐時代の作品であるとしてきた。

だが、唐時代というのは本当であろうか。龍村平蔵は、この点を確かめたいと考えた。

ある日のこと、龍村平蔵は、自分の研究所（「織物美術研究所」）で資料を調べているうちに、思いがけぬ手がかりを発見した。彼の視線をふとひきつけたのは、一枚のペルシアの銀皿であった。銀皿に彫られているのは、頭に王冠を頂き、馬上から獅子に向かって弓を引く、ササン朝ペルシア王、シャープール二世の肖像であった。その構図は、あの法隆寺の「獅狩文錦」の文様と全く同じであるといってもよかった。全く同じ構図をもった二つの文様――その一方は実在したペルシア王の肖像である。すると、法隆寺の錦の文様の肖像も、現実に存在したペルシア王のものではないだろうか。彼は、法隆寺の錦の肖像を子細に点検してみた。肖像の人物は羽の生えた天馬に乗っていた。これは、この馬上の人物が単なる武将ではなく、天馬に乗る神格をもった者、すなわち王であることを示している。そして、この王は、日と月を組み合わせたものに翼をつけた冠をかぶっていた。ササン朝時代のペルシア王の冠の形が、歴代の王によってそれぞれ異なった特徴をもっていることを、彼はかねて聞いていた。翼に抱かれた日月冠の王。それは、いったい何王なのか。彼は美術書のページを繰って、ササン朝ペルシアの貨幣の写真を、一つ一つ丹念に調べていった。ペルシアの貨幣にはその時代時代の王の肖像が刻まれていたからである。

こうして、ついに龍村平蔵は見つけ出した。翼のついた日月冠の王の名はホスロー二世。つまり、法隆寺の錦は、ペルシア王、ホスロー二世の肖像を織り込んだ錦であったのだ。ホスロー二世は、七世紀の初めエジプトに侵入してアレキサンドリアを占領し、その地の織物職人たちをペルシアに連れ帰り、クテシフォンに絹織物の工場を造った人物として知られている。記録によれば、それは西暦六一六年のことである。中国に唐の王朝が建てられたのはそれより二年後の六一八年である。つまり、唐の時代には、ペルシアはすでに自らの国で絹を織る技術をもっていたということになる。だからこの時点でもしペルシアが国王の肖像入りの錦を作るとすれば、恐らく自分の国の工場で、アレキサンドリアから連れてきた織匠たちに織らせたであろう。

ところで、現在ベルリンの博物館に、ササン朝ペルシア最後の王、ヤズデゲルド三世の肖像入りの錦が残っている。それを見ると、その織り方は織り目のあらいものであり、アンチノエやアクミンで出土するエジプトやギリシア系の錦と同じものである。これが恐らくペルシアのクテシフォンで織られたものと考えられる。これに対して、法隆寺の「獅狩文錦」は、最高級の精巧な作品であり、当時のクテシフォンには、このような技術があったとは考えにくい。

龍村平蔵は、ここで一つの結論に達した。

この錦は、フェノロサ以来いわれているように、中国で織られたものであろう。しかもその時代は、ペルシアがクテシフォンに自らの絹織物工場を造った六一六年以前――すなわち、中国では隋の時代だったということになるのではなかろうか。

五　失われた文様

あまりによく似た文様をもつ二つの錦。龍村平蔵には、その二つを結びつけるなぞの糸がどこかにあるような気がした。だが、ミイラの仮面の錦は、まだその円文

様の下半分に大きな穴を残したままであった。上下左右展開の手法によって輪郭は明らかになってきたが、残された穴を埋めるべき文様は、朽ち欠けた仮面の中からもはや永久に失われていたのである。

このころ、すでに龍村平蔵の心の中では、このミイラの仮面の錦を、なんとか昔の完全な姿に復元してみたいという願いが抑えがたいものとなっていた。だが、失われた文様の手がかりはつかめぬまま、橘瑞超のもとでミイラの仮面を初めて見てから、もう一年以上の月日が流れていた。

ある日、龍村平蔵の頭に、ふと思い浮かんだことがあった。

ミイラの仮面に残された「花樹対鹿」という文字は、いったい何を物語っているのであろうか。花と樹と向かい合う二頭の鹿――。この四個の文字は、錦の文様を構成する要素の一つ一つを表しているのにちがいない。そうだとすれば、一本の樹木をはさんで向かい合う二頭の鹿という構図、つまり四個の文字のうち三字の示す要素は、今残されている文様の中にすでに存在している。すると、残る一文字は「花」である。失われた文様は花であったにちがいない。だが、それはいったい、何の花だったのであろうか。

龍村平蔵は考えた。日本で、ただ単に「花」といえば、それが桜の花をさすように、中国で「花」といえば、それはぼたんを意味するのだという。そういえば隋王朝の国花もぼたんの花であった。また、スタインによってトルファンから発掘された織物の文様の中にも、ぼたんの花を図案化したものが幾つかある。

龍村平蔵は、残された空白をぼたんの花の図案で埋めてみた。彼にとって、これだけが、検証のないただ一つの創作であった。

六　よみがえる幻の錦

文様の復元を終えた龍村平蔵にとって、次の仕事は昔の色彩の忠実な復元であった。仮面の錦は、千年を超える長い歳月の流れの中ですっかり色あせてしまっていた。だが、龍村平蔵はあきらめなかった。その色あせた錦の断片の中から、幻の華麗な色彩を確実に読み取っていった。例えば、今この目の前にある黒ずんだ茶色は、千年前には鮮やかな赤い色であったはずだ。彼の多年にわたる色彩研究の結果蓄積された、何千という数の色糸の見本が、それを教えてくれた。見る影もなく色あせ、黒ずんでしまったぼろの中から、龍村平蔵は千年以上も前の美しい幻の色を次々に引き出していったのである。

色が決められると、京染めの職人たちによって、いよいよ染めの作業が始められた。赤色は紅花と茜、黄色はくちなし、染料はすべて古代中国で用いられたものと同じ天然染料が使われた。すべての仕事が、機械化された現代の手法を拒否して、原始的な方法で行われた。染めの作業は、特に天然の染料を使う場合には、幾度も幾度も繰り返されなければならない。その最も多いものは四十回を超えた。

糸が染めあがると、古代の中国そのままの、巨大な手機が動き始めた。気の遠くなるような、長い長い時間の旅が始まったのである。しかし、龍村平蔵には、錦を織り続ける手機の音が、何にもまして美しい音楽に聞こえてきた。春に動き始めた手機は、夏が去り秋が来てもまだその動きをやめなかった。遅い歩みではあったが、経糸の上を緯糸が一度走るたびに、仮面の錦は、着実にそのいにしえの幻の姿を現していった。龍村平蔵は、本当の意味での復元とは、単にできあがったその結果だけをいうのではなく、それを作った昔の人の心になりきって作りあげることだと信じていた。染め手も、織り手も、彼とともにその仕事を成し遂げたのである。

こうして、幻の錦はついによみがえった。

千数百年の長い歳月を、シルクロードの地の底深く眠っていたミイラの仮面の錦は、二十世紀の日本にその華麗な姿を再び現したのである。それは、ミイラの仮面との初めての出会いから五年の歳月を経た、一九六五年のことである。龍村平蔵は、復元されたこの錦を「花樹対鹿錦」と名づけた。

七　不思議な一致

さて、こうして復元されたミイラの仮面の錦、すなわち「花樹対鹿錦」と、法隆寺の「獅狩文錦」とを比べてみると、非常に多くの共通点が浮かび上がってきた。

第一に、両方とも、一本の樹木を中心軸として、左右対称に織られた文様構成であること。しかも、その左右対称の文様は、全く同じ構造をもつ円文の中に納められており、円文の間にあるアーカンサス十字唐草は、ほとんど同一といってよいデザインである。また、使われている色の種類、配色の構想もほとんど同じである。

さらに、なによりも重要なことは、織物技術上の一致であった。二つの錦の織り方の特徴は、あまりにもよく似ていた。錦の織り方は、設計者、すなわち「綾の司」によってそれぞれ得意とする糸の組み方があり、その技法は千差万別である。ところが、この二つの錦は、その織り方の技術が全く同じなのである。

この一致は、もはや偶然ではない。だとすれば、この事実はいったい何を物語っているのであろうか。

龍村平蔵は一つの結論に到達した。

二つの錦は、同じ隋の時代に、少なくとも同じ工場で、同じ流派に属する織匠によって織られたものにちがいない。あるいはもしかすると、同一の織機、同一の織匠によって織られたのかもしれない。

では、その二つの錦のうち、なぜ一方が日本の法隆寺に伝えられ、他の一方は、西域、高昌国の廃墟に、ミイラの仮面となってうずもれていたのであろうか。

八　歴史を織る糸

中国の『隋書』はこう記述している。

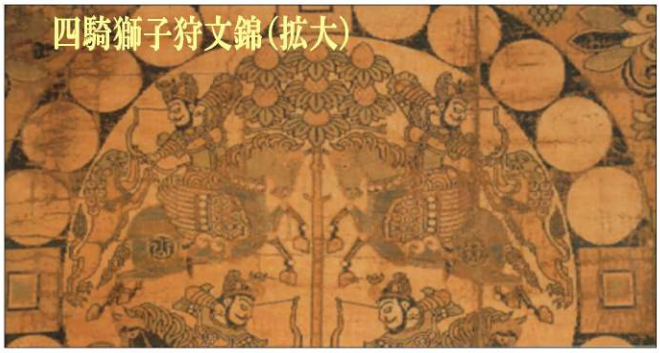
「隋の煬帝は西域を制圧し、そのため、西域諸国の王は皆、隋の都、長安へやって来て貢ぎ物をささげた。当時トルファンのオアシスにあった高昌国の王、麴伯雅もその一人であった。」

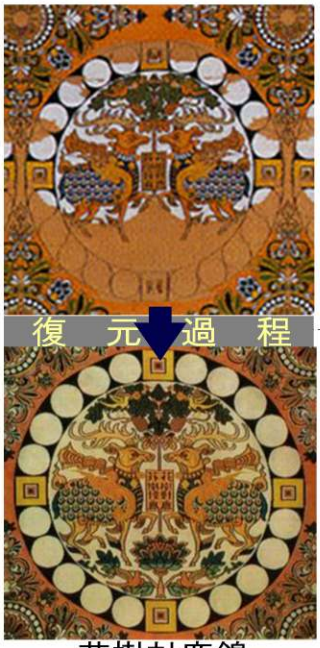
高昌王麴伯雅が長安で隋の煬帝に謁したのは、西暦六〇九年のことであった。そして、この六〇九年には、その前年聖徳太子によって遣わされた遣隋使小野妹子が、長安に滞在していた。

つまり、高昌王麴伯雅と日本の遣隋使小野妹子は、同じ年に長安で煬帝に謁したのである。歴史上、日本と隋、高昌国と隋の接触はこの時をおいてほかにはない。

龍村平蔵は、ここで最後の結論に達した。――隋で織られた二つの錦のうち、一つは小野妹子によって日本へ、そして一つは高昌王によって、西域、トルファンに運ばれたのではあるまいか。

こう考えれば、ここに、法隆寺の錦のなぞは解き明かされ、かつて、東方の島国日本と中国、そして、西域を結んだ一本の歴史の糸が、鮮やかに浮かび上がってくるのである。

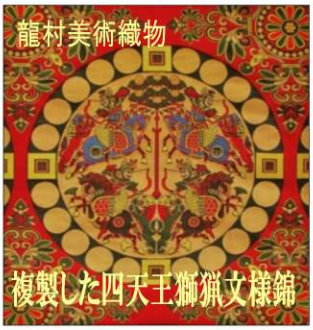


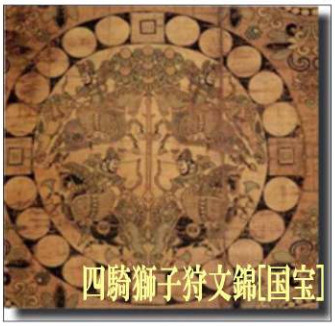


下部の文様が不明の状態

下部の文様を入れた状態

花樹対鹿錦





国語学習プリント「幻の錦」

◎「法隆寺」について

（ア　　）世紀初め＝（イ　　時代）、

（ウ　　）によって、（エ　　）された

と伝えられ、現存する世界最古の

（オ　　）といわれている。

●（ウ　　）→五七四～六二二年、

（a　　）天皇の摂政として、

（b　　）を定め、

（c　　）の制定や

（d　　）の派遣、仏教の

奨励などを行った人物

一　法隆寺――錦のなぞ

① 法隆寺の夢殿から救世観音とともに発見されたものとは

[A　　]

それは、誰によって発見されたのか

[B　　]

② [A　　]は、[C　　]の「錦の御旗」と

法隆寺の伝説に伝えられている。

③ [A　　]の由来については深いなぞに包まれている。

その由来のなぞを解くことを、長い間の課題であり、念願としていた人物は、[D　　]である。

二　シルクロードの記憶

◆「不思議な錦の断片」

① 誰が、どこで手に入れたものであったか。

② 何に使われていたものか。

③ 「恐らくその時、想像すらしなかったであろう。」とあるが、何を。

三　ミイラの仮面

① ミイラの亀の錦の断片に見えた文様三つ

1

2

3

② 「そのなぞ」とあるが、ここでいう謎の内容。（本文中より抜き出す）

③ ①の3から、龍村平蔵はどんなことに気づいたか。

・また、このことから、この錦の文様がどんな形式で織られたと考えたか

四　肖像の秘密

① 法隆寺の「獅狩文錦」は、今までは、aどこで、bいつごろ 織られたとされていたのか。a（　　）b（　　）

②「思いがけぬ手がかり」とは、どういうことを指してそういっているのか。

③その手がかりから、「獅狩文錦」の肖像が、
a誰であるとつきとめたか。（　　）
bその決め手となったものとは。（　　）

④・（　　）がクテシフォンに絹織物工場作ったのは（　　）年。
・唐の王朝の成立は（　　）年。

⑤当時のペルシアの錦と「獅狩文錦」との織り方の面からの比較。

・ペルシアの錦
・「猪狩文錦」

⑥龍村平蔵の出した結論

五　失われた文様

①ミイラの仮面の失われた文様を、何を手がかりにして推定したか。

②龍村平蔵が考えた「失われた文様」の図案としたものは。

六　よみがえる幻の錦

①文様の復元の次に龍村平蔵が取り組んだ課題。

②復元にあたって、染めや織りの点で注意（配慮）したこと。

・染め
・織り

③龍村平蔵の復元に対する考え方をよく表している一文。

七　不思議な一致

①何と何の間に一致（共通点）があったのか。

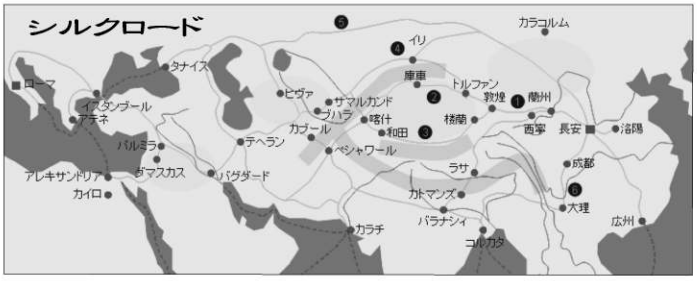
と

②その共通点とは

③その事実から龍村平蔵が導き出した結論とは。

八　歴史を織る糸

①『隋書』は、どんな事実を述べるために引用されたのか。

②六〇九年に長安にいた日本人の名とその役目。

③龍村平蔵の達した最後の結論とは。